

<前回・オリエンテーション>

A. テーマ：キリスト教思想研究入門

「現代キリスト教思想史——弁証法神学から1960年代」

B. 目的

C. 到達目標

D. 確認事項

E. 授業スケジュール

0. オリエンテーション+導入

1. 西欧近代とキリスト教 4/20
2. 19世紀キリスト教思想の遺産 4/27
3. バルト1 5/11
4. バルト2 5/18
5. ブルトマン1 5/25
6. ブルトマン2 6/1
7. ティリッヒ1 6/8
8. ティリッヒ2 6/15
9. H・R・ニーバー 6/22
10. ホワイトヘッドとプロセス神学1 6/29
11. ホワイトヘッドとプロセス神学2 7/6
12. ハイデッガーと解釈学的神学1 7/13
13. ハイデッガーと解釈学的神学2 7/20
- (14. 20世紀キリスト教思想の遺産 7/27)

<導入>

***現代神学における体系構想**

A. 戦後・組織神学の歩みと課題 (『福音と世界』2015. 8)

B. 書評：芳賀力『神学の小径Ⅲ 創造への問い』キリスト新聞社、2015年。

1. 西欧近代とキリスト教

(1) キリスト教的伝統の歴史的な理解

1. キリスト教的伝統の複合性：「ヘブライズム」(Hebraism)と「ヘレニズム」(Hellenism)の類型論 (19世紀以来、マシュー・アーノルドの主張を通して普及)

近代における、ギリシャ的近代伝統との差異化におけるユダヤ伝統の複合性あるいは緊張関係の自覚→類型論 (「ルネサンスと宗教改革」)。

2. 水垣渉「ヘブライズム・ヘレニズム・キリスト教」武藤一雄・平石善司編『キリスト教を学ぶ人のために』世界思想社、1985年、24-34頁。

3. キリスト教神学の形成過程：キリスト教のギリシャ化 (ハルナック)

古代地中海世界におけるキリスト教の形成・展開、ギリシャ・ローマ文化世界のキリスト教化でもあった。

4. Ingolf U. Dalferth, *Theology and Philosophy*, Basil Blackwell, 1988.

キリスト教神学は先行するギリシャの哲学的神学を学的基礎としつつ、キリスト論によって哲学的神学を変革した。

5. ハヤ・オントロギア：有賀鐵太郎

ヘレニズムとヘブライズムのそれぞれの思考の核心を、オントロギアとハヤトロギアとして分析した上で、キリスト教を両者の動的関係体としてのハヤ・オントロギアと説明。

「ハヤトロギアとオントロギアとの間における緊張関係が問題とならざるをえない。私の言いたいことは、その何れか一方を切りずてることではなく、また両者の早急な総合を求めることでもなく、むしろ両者の相異を認めながら、その関係を緊張関係、すなわちトノーシスとして捕えるべきだということである。」

有賀鐵太郎「神学的原理としてのトノーシス」(1973)『信仰・歴史・実践』(『有賀鐵太郎著作集 五』)創文社、1981年、182頁。この点については、芦名定道『自然神学再考』(晃洋書房、2007年、31-134頁)も参照。

6. 近代啓蒙思想の意義＝歴史意識の成立

歴史主義の誕生 → 伝統の歴史的反省 → 伝統の多重性の発見

ヘレニズムとヘブライズムという

問題設定の誕生

(2) いつから近代か

7. 時代区分としての「近代」：中世とポスト近代(あるいは現代)との対比における近代。

そもそも「中世」という時代区分は、近代の側から古代と近代の間の時代として、基本的に否定的なニュアンスで使用された。

8. トレルチの場合：

・おおよそ17世紀までと18世紀以降において区切られた古プロテスタンティズムと新プロテスタンティズム。これは、啓蒙主義の以前と以降に対応する。

9. 「宗教改革とルネサンスとがこの人文主義的新プロテスタンティズムのなかでこのようにして融合した状況がそのまま長続きしなかったことはいままでのない。新プロテスタンティズムのなかで結びつけられたこの二つの基本的傾向(die Grundrichtungen)はふたたび次のような種々のかたちで分離するに至った。」(Troeltsch, 1913b, 294)

「啓蒙主義は、教会や神学によって決定されていた従来の支配的文化に対立することによって、ヨーロッパの文化と歴史における厳密な意味での近代の開始であり基礎をなすものである。」(Troeltsch, 1897, 338)

トレルチ「ルネサンスと宗教改革」(1913) (『ルネサンスと宗教改革』内田芳明訳、岩波文庫。Ernst Troeltsch, *Gesammelte Schriften 4. Aufsätze zur Geistesgeschichte und Religionssoziologie*, Scientia Verlag, 1981(hrsg.v. Hans Baron, 1925))

10. 啓蒙主義：単なる政治思想や思想運動を超えて、「生の全領域にわたる文化の全面的変革」(eine Gesamtumwälzung der Kultur auf allen Lebensgebieten, *ibid.*, 339)を意味しており、「国家契約説」(国家の神学的基礎の破壊)、「近代の寛容国家」「教会の自然法的解釈」、「政治的、経済的、そして精神的自由を欲求する市民階層」、「新しい経済理論および社会理論」「重農主義」、「自然道徳」「自然宗教」、「新しい数学的・機械論的自然科学」、「コンセンサスや自然主義」、「啓蒙文学」、「新しい教育制度」、「啓蒙主義の神学」といった広範な諸契機を統合するものと理解されねばならない。

11. 「正統信仰もしくは国家教会としての古プロテスタンティズムと、近代思想によって縦横に浸透された自由教會的、平等的な新プロテスタンティズム」(Troeltsch, 1913a, 191)の二つのプロテスタンティズム。

↓

トレルチは、近代の内部に決定的な変動を読み取ることによって、いわば近代を広義の

近代と狭義の（厳密な意味での）近代の二つの意味で使用し、18 世紀以降のキリスト教が置かれた近代の状況の明確化を試みている。

12. 次の世代に属するティリッヒ：トレルチの論じた啓蒙的近代の特徴を、トレルチ同様に、「数学的自然科学、技術、経済」の「三重の活動性」(dreifacche Tätigkeit)とその担い手としての「市民社会」として捉え(Tillich, 1926, 32-36)、また啓蒙主義に関しても、その内実について、理性概念（普遍的、批判的、直観的、技術的理性）、自然概念（超自然に対する）、調和概念（世界観的、教育的、経済的）という観点から分析(Tillich, 1972)。

13. ブルジョワ社会＝近代について、革命(17-18 世紀)、勝利(19 世紀)、崩壊・変容(20 世紀)という三つの段階を区別(Tillich, 1945)。

ティリッヒの関心は、革命とその勝利の中から形成された 18 世紀以降の近代がどのように崩壊・変容し——啓蒙主義の成立とその内的な葛藤、そして諸伝統の総合の試みとその挫折——、また現代の錯綜した動向の中に、どのような新しい精神状況の萌芽を見いだしうるか、という点に向けられている。

↓

ティリッヒの世代はトレルチの世代以上に、近代世界の崩壊（第一次世界大戦と革命）の実感の中で、近代以降の（その意味では、ポスト近代の）精神的動向に関心を払っていた。宗教社会主義の構想、現象学と存在論への注目、実存思想への共感、そしてポスト・プロテスタント時代の展望、科学と宗教との対立図式の克服、といったティリッヒの一連の思想的試みは、こうした思想的文脈に位置付けることができる。

14. パネンベルク：16 世紀の宗教改革から 18 世紀の啓蒙的近代に至る歴史的過程の分析。

『ドイツにおける新しい福音主義神学の問題史』(Pannenberg, 1997)において、19 世紀のドイツ・プロテスタント神学の問題状況を規定するものとして宗教改革後の宗教戦争の帰結、つまり教派的多元性の状況に注目。

宗教改革後の宗教戦争は、キリスト教的統一世界 (Corpus Christianum) の分裂の固定化、つまり教派的多元性の状況を帰結したが、それは市民社会の統合がもはや宗教的統一性によっては確保できないことを意味した。むしろ、市民社会の安定化のためには、その不安定要因である教派的対立の激化を克服しなければならなかったのであり、ここに成立したのが、宗教的寛容論（信教の自由）と政教分離システムだったのである。その結果、宗教は私的領域に位置づけられ(Privatisierung der Religion)——公的領域に教派的対立をもちこまない——、市民社会の統合原理は、宗教と教会から、人間性と国家（絶対主義と国民国家）へと移行し（＝世俗化）、知的世界の中心も神学から哲学へと移ることになる。トレルチが、啓蒙主義と人文主義的新プロテスタンティズムとして論じた状況の成立である。

15. トレルチからティリッヒ、そしてパネンベルクに至る 100 年にわたるキリスト教思想における近代論。

近代とは、諸伝統の緊張関係に規定されて展開した、中世からポスト近代へと至る動的プロセスであるが、それ自体の中にいくつかの決定的な変遷・段階的区分が認められる。つまり、近代とは単純な一様性において理解できるのではなく、諸伝統と諸領域（諸サブシステム）のゆるやかなネットワークとでも言うべき構造と動的プロセスとによって、捉えられねばならないのである。

(3) 時代区分する研究者の視点

16. 時代区分は、単なる主観の問題ではないとしても、一義的な客観性によって規定でき

る問題ではない。歴史的展開過程の中に現れたどの要素に注目するのか、何を指標にして時代区分を行うのか、に関わる研究者の側の視点をぬきに、時代区分を論じることはできない。つまり、時代区分する際に注目されるメルクマールの設定という問題である。

↓

17. 近代というシステムを構成する諸サブシステム。

近代の形成に対するキリスト教、とくにプロテスタント・キリスト教の決定的な寄与。

・マックス・ウェーバー：プロテスタント（カルヴィニズム）の禁欲的エートスと資本主義の精神との関係（ウェーバー・テーゼ）

・リンゼイ：ピューリタンの教会会議の経験と議会制民主主義との積極的関わり（リンゼイ・テーゼ）

・マートン：ピューリタンの科学者が近代科学の成立に重要な寄与。

↓

イギリス、17世紀から18世紀にかけての時期が、これらのサブシステムの成立期。

トレルチの言う古から新へのプロテスタンティズムの転換。

18. サブシステムがその後世界的規模で展開してゆく際に、それらの移動と定着について、サブシステム間にかなりの時間差が生じている。

↓

サブシステム間の時差の存在。どのサブシステムに近代のメルクマールを見るかによって、近代の始まりの時期が異なってくる。

日本はいつ近代化したと考えるべきであろうか。

19. テオドール・ウォーカーの場合。黒人神学（Black Theology）の立場。

大西洋を横断した近代奴隷制の成立こそが近代のメルクマール——「近代の歴史をそれ以前の歴史から区別する主要な出来事」——である。

Theodore Walker Jr., *Mothership Connections. A Black Atlantic Synthesis of Neoclassical Metaphysics and Black Theology*, State University of New York Press, 2004.

20. 「近代は、17世紀のガリレオ的デカルト的ベーコン的ニュートンの科学から発展した世界観(worldview)である」(Walker, 2004, 3)というグリフィンらのポスト近代神学の提唱者たち——構成主義的タイプのポスト近代神学(the constructive type of postmodern theology)——に共有された見解。近代をこのように理解する場合、ポスト近代を主張することは、近代的世界観が生み出した破壊的側面を乗り越えることを意味する。

「近代世界を乗り越えて進むことは、近代の個人主義、人間中心主義、家父長制、機械化、経済主義、消費主義、ナショナリズム、そして軍国主義を超越することを含意するであろう」(ibid., 4)。

こうした近代理解が一定の真理契機を有していること。「近代性のしるし、つまり、科学と奴隷制、あるいはより正確には、近代科学と大西洋横断的な奴隷制」について、「黒人的な大西洋的思想は、科学と奴隷制の双方を認識している」(ibid., 16)——。

21. ウォーカーが近代の決定的メルクマールと考えるのは、近代奴隷制。なぜなら、人間と土地を商品化(commodification)する制度は、近代的な人間関係の理解にとって本質的なものであり、近代的なアイデンティティに決定的な影響を与えているからである。

「アフリカのアイデンティティは植民地主義と大西洋横断的な奴隷制の後に生じた」、「同じことは他の近代的なアイデンティティにも妥当する。これらの他のアイデンティティには、ヨーロッパ的、ヨーロッパアメリカ的、白人的、黒人的、肌の赤い、アメリカ・インディアン、そしてネイティブ・アメリカンのアイデンティティが含まれる。これらの色で

コード化され土地に定位した語彙、そしてそれ関連した諸理論は、大西洋横断的な発見、征服、奴隷、植民地主義に対する応答の中で溶け合っている。」(ibid., 11)

22. 大西洋横断的な近代的奴隷制度に近代のメルクマールを求めるならば、近代は17世紀から18世紀の近代科学の形成期から遡ること数百年前の15世紀にその出発点を見いださねばなくなる。なぜなら、「1444年8月8日、ポルトガルによってアフリカから235人の商品化された人間の売買が積み荷として船積みされた」(ibid., 15)からである。

この場合、「近代主義の克服とは、奴隷商人、奴隷保有者、そして近代的な経済的社会的関係から利益を得た他の人々によって共有された世界観の克服を意味する」(ibid., 10)。

奴隷制は古代ギリシャやローマの遺産とも言える側面を有しつつも、「近代的奴隷制は、キリスト教徒によって生み出され継続された」(ibid., 21)こと。

↓

近代は、「国民国家」という観点から特徴付けることができる。

国民の登場：初等教育と民主主義、徴兵制と近代的な税制

これは、西欧内部での近代戦争と外部での植民地主義を生み出した。

ファシズムは近代といかなる関係にあるのか。

<文献>

1. Ernst Troeltsch,

- "Das Verhältnis des Protestantismus zur Kultur (1913a)", in: *Gesammelte Schriften 4. Aufsätze zur Geistesgeschichte und Religionssoziologie*, Scientia Verlag, 1981 (hrsg.v. Hans Baron, 1925), S.191-202. (「プロテスタントイズムと文化との関係」『ルネサンスと宗教改革』内田芳明訳、岩波文庫、1959年、165-186頁。)
- "Renaissance und Reformation (1913b)", in: ibid., S.261-296. (「ルネサンスと宗教改革」『ルネサンスと宗教改革』内田芳明訳、岩波文庫、1959年、11-76頁。)
- "Aufklärung (1897)", in: ibid., S.338-374. (『ルネサンスと宗教改革』内田芳明訳、岩波文庫、1959年、87-152頁。)

2. Paul Tillich,

- *Die religiöse Lage der Gegenwart* (1926), in: *Paul Tillich. MainWorks 5*, de Gruyter, 1988. (「現代の宗教状況」(1945)、『ティリッヒ著作集 第八巻』近藤勝彦訳、白水社、1978年、9-132頁。)
- *The World Situation* (1945), in: Ronald H. Stone (ed.), *Paul Tillich. Theology of Peace*, Westminster/John Knox Press, 1990. (ティリッヒ『平和の神学 1938-1965』ロナルド・ストーン編、芦名定道監訳、新教出版社、2003年、157-225頁。)
- *A History of Christian Thought. From its Judaic and Hellenistic Origins to Existentialism* (ed. by Carl E. Braaten), Simon and Schuster, 1972 (1967/68). (『ティリッヒ著作集 別巻三』佐藤敏夫訳、白水社、1980年。)

3. Wolfhart Pannenberg,

- *Theologie und Philosophie*, Vandenhoeck & Ruprecht, 1996.
- *Problemggeschichte der neueren evangelischen Theologie in Deutschland. Von Schleiermacher bis zu Barth und Tillich*, 1997.